

(注意、今日お話しするヒュームという人は、山川の『世界史』の教科書には出てきません。ということは世界史のセンター試験には出てこないと考えられます。しかし、『倫理』の教科書にはしっかりでてきます)

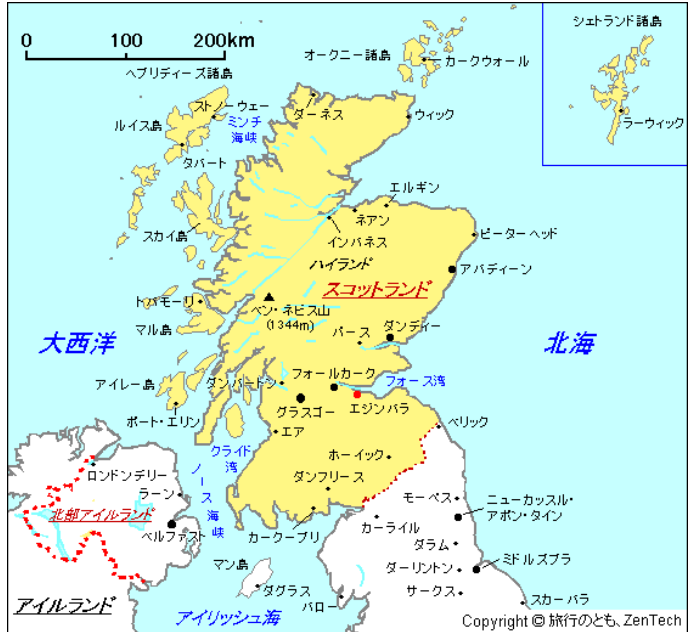
先日から、近代哲学のもう一つの潮流としてイギリスで盛んになった経験論の話をしていきます。これはベーコン、ロック、バークリーのあと、デイヴィッド・ヒューム(1711~76)という人で行き着くところまで行ってしまいます。ヒュームはイギリスの北部にあるスコットランドの人です。この地はスコッチウイスキーで有名ですが、ロンドンを中心とするイングランドとは昔は言葉も民族も異なり、1707年までエディンバラを首都とする別の国でした。18世紀にイングランドと統合されるのですが、その後スコットランドは文化が開花します。ちょうどヒュームが活躍する時代です。

『諸国民の富』で有名なアダム・スミス(1723~90)もスコットランドの人で、ヒュームとスミスは友達でした。アダム・スミスは自由主義経済の父として有名ですが、スコットランドの

もう一つの大都市グラスゴーの大学で道徳哲学を教えていました。彼は道徳哲学の教授として、自然神学、倫理学、法学を教えたのですが、当時の法学は今で言えば経済学や政治学も含んでいて、その中に『諸国民の富』の原案が入っていたのです。この本の思想は、「人間ちゅうもんは、ほっておいたら誰でも自分のもうけを考えて働きよる。せやから、政府は経済活動にはできるだけ干渉せずに、ただそれが支障なく行われるよう環境の整備をするだけにしときなさい」というものですが、それは「人間とは利己心で生きる。が、人の目を気にして過度の利己心を押さえる」という人間観から出発しています。中国の性悪論と似ていますね。

ともかく、法学も経済学も社会学も人間に関する学問は、まず人間とはどういうものかという人間観から出発するので、結局なんらかの哲学を土台に置いているのです。大学に入れば「経済原論」とか「法学原論」とかいう科目がありますが、「原論」とは経済学や法学を根本から説明していく科目です。ところで、大学ではそんな原論を勉強しても司法試験に合格するわけではないので、(それより六法全書に載っている法律の条文を勉強した方がずっと役に立つ)現在日本の大学では原論を教える先生は職がなくして苦しんでいるそうです。

さて、ヒュームに戻りますが、この人はロックが始めた経験論を推し進めた人で、有名なことは因果律を否定したことです。因果律というのは、原因と結果の関係のことです。例えば、ボーリングで転がしたボールがピンに当たって、ピンが転ぶのを見ると、普通「ボールがピンにぶつかったことが原因で、その結果ピンが倒れた」と考えるでしょう。つまり、ボールがぶつかったことと、ピンが倒



れたことは、原因と結果の関係で結ばれている。

ところが、筋金入りの経験論者ヒュームは、そうは考えないのです。つまり、経験論では、知識は五感に感じるものから来ると考えます。だから、五感に感じないものは、知識の対象になりません。ボーリングの例で言えば、目に見えることは、「ボールが転がっていく」、「ピンにぶつかった」、「ピンが倒れた」という三つの現象だけであって、ボールがぶつかったことと、ピンが倒れたことの間、原因と結果の関係があるなんて目には見えない。だから、原因と結果の結びつきはありと云いきれない、という結論になるのです。



「でも、それなら、何で私たちはその二つの現象の間に原因と結果の関係（因果関係）があると考えなのか」という疑問が出てくるでしょう。それに対して、ヒュームが答える言うには、「それはな、我々は、ボールがぶつかり、そのすぐ後にピンが倒れるというふうに、二つの異なる現象が引き続いて起こることを、何度も何度も繰り返されるのを見ているうちに、その二つの現象の間に原因と結果があると想像してしまうのや。つまり、そういうふうに思うという習慣を身につけてしまうんや。すまんのう」と。つまり、因果律（因果性）というものは、人間がそういうふうに考える習慣を持っているから、何か起こると何か原因があると思ってしまう、というわけ。言い換えれば、それは思い込みすぎないとなります。そうして、ヒュームは「原因のない出来事もある」と断言。この考えは「あらゆる結果には原因がある」としたアリストテレスの命題も、第一原因の神以外のすべては原因を持つというスコラ哲学の考えも否定するものでした。



もしヒュームのいうように、因果律が人間の思い込み似すぎないなら、どうなるか。一つは、神の存在の証明が不可能になります。なぜかと言うと、神の存在証明は、自然界という目に見えるものから出発して、結果 原因の関係を遡って、第一原因としての見えない神に到達するものだからです。このほかにも多くの不思議がでてきます。

例えば、あるところで死体が見つかるとうましよう（ちょっと気持ちの悪い例ですみません）。その現場に駆けつけた警察は、必ず死因を突き止めようとするでしょう。「いや、ヒュームが言うように、何の原因もなく死ぬ可能性もあるぞ」と言ったら、「おまえはあほか」と言われて一笑に付されるだけ。また以前言いましたように「学問とは原因についての確かな知識」と定義できるのですが、原因なしの出来事があるなら、学問自体が成立しなくなる。

経験論を推し進めていくと、感覚で捉えることのできないものは知識の対象になり得ないのでから、原因と結果の関係だけでなく、目的、価値、理由、そのほか感覚では捉えきれないが、知性で捉えることができる無数のものが、無意味になってしまうのです。

そうなると、自然科学だけではなく、存在のすべてを説明しようとする哲学（形而上学と言います）も不可能になる。これを見て、「それはえらいこっちゃ、形而上学は可能やるか」という問を立てたのが、エンマヌエル・カント（1724~1804）でした。